

① 人工
② 地形
③ 体力

④ 台風
⑤ 市

② それ
① は
② え
② も
② の

③ 夜
③ ウ
④
④ イ
⑤
⑥ ア
⑤ ウ
⑥ ア
⑤
⑥ ア
⑤
⑥ ア

③ 自由
① イ
③ ウ
④ ア

③ ア
④ ア

⑤ ハ
⑤ ヤ

⑥ ゆ
⑥ だ
⑥ ん

配点	
①	各2点×5=10点
②~③	各5点×18=90点
＜計＞100点	

1 漢字の書きとり問題は小学校二年生までに学習したものを出题している。④の「風」をのぞけば、字形そのものはかんたんなものばかりである。ことばをたくさん知っているかどうかという観点から出题した。漢字の学習は、字の学習でもあるが、ことばを知る学習でもあり、最終的にはこちらの面が重要になる。

2

1 本文後半に二つの問いかけがあった。ひとつめは、「フクロウは、なぜ③でも物が見えるのでしょうか」、そしてふたつめが「フクロウは、なぜ羽音をたてずに飛ぶことができるのでしょうか」である。このふたつめの問いかけのあとに、「音もたてず」の理由が書かれているはずである。本文中の問いかけはとても重要なので、絶対に見落とさないように気をつけよう。

2 もちろんすべて動物であるが、それだけでなく、「フクロウ」が「つかまえる」動物である。それを、フクロウからみれば何とすることができるか。

3 ひとつめの問いかけである。つづく部分は、「月や星あかりなど、わずかな光があれば、物をみわけることができる」ということを説明している。

4 ④は、「綿毛につつまれているような」とつづく。この「ような」に注目する。⑤は、「感度の高い目は、昼は⑤「不便です」という一文になっている。目の感度が高いので、夜はとても便利だけれど、昼は「ぎやくに」不便になる、と言っているのである。⑥は、「とどかない」につづくところである。この「ない」に注目する。

5 「まぶた」の話は、前の段落にも出てくる。そこには、「ひとみをしぼり、まぶたをせばめても、まだまぶしすぎる」と書かれていた。

6 ア 「目はよい」の部分は何の問題もないが、「耳はわるい」がおかしい。第三段落に「えものが音をたてると、それを敏感にききわけて、その方角をめざして、さっと飛びたっていきます」と書かれていたので、むしろ耳はかなりよいと考えることができる。

イ 「人間の十〇百倍」に近い内容は、本文中では「フクロウの大きな目は、人間の目の、およそ十〇百倍もの感度がある」といわれています」と書かれていた。これは、つづく部分に書かれているように、「わずかな光があれば、物をみわけることができる」ということである。「目の大きさ」が「十〇百倍」あるのではない。

ウ はじめに「ネズミやモグラ、小鳥などをおそってつかまえます」と書かれていた。

3

1 「あじわう」ということばが、本文の最後の方に出てくる。そこには「ひとときの自由をあじわう」と書かれていた。

2 いちばんわかりやすいのは④で、「つめたいコケ」のようすをあらわしたことから、「ひやひや」がえらべるだろう。つぎにわかりやすいのはおそらく③で、「血が」「煮えたぎってくる」ようすをあらわしている。②は、「野生の、木のおい」をあらわしたことばである。これが「ひりひり」になるのがわかりにくいかもしれないが、人の家でやしなわれているハヤにとつては、緊張感があるにおいだということなのである。

3 「心のかぶりが少しおさまる」とつづくのだから、ここより前にあるはずである。心がたかぶっているとは、興奮しているということである。「煮えたぎって」ということばが「興奮」にぴったりである。

4 「太郎は、このまま……いなくなってしまうのではないだろうか」と「心配になって……かけもどってくる」と、太郎がいたところである。

5 「太郎の動作に注意し」ているのだから、ハヤしか考えられない。すぐ前に出てくることばを書けばいいというものではない。

6 「くさり」の話は、はじめの方にあった。「ぶあいそう」で、「野性的な目のかやき」をもっているために、「ゆだんのならない犬」だと思われるのである。「ということ……まだくさりにつながれたままである」とはつきり書かれていた。